

Illustr. : Ohisuka Ichio

■ Trans-Context ■



photo: Anusu Kikaku

I | n | t | e | r | F | e | e | l | D | e | s | i | g | n |

インターフィール・デザイン

イーストビレッジのどんでん返し
私のアパートは、マンハッタンのサードストリート、アベニューBとCの間に位置していた。このあたりはA、B、C、Dという無味乾燥な通り名にちなんで、通称“アルファベットジャングル”と呼ばれ、その名にふさわしく、タクシーさえも通過を嫌がる超危険地帯であった。

ある日、「今夜、屋上のテラスで友達を集めてパーティーをやるから、キミもおいでよ」。真向かいの部屋に住むエディに誘われて、私は自分の部屋続きにある屋上のパーティーに参加した。会場はすでに100人ほどのさまざまな人種の先客でごった返している。紹介されるがままに5、6人と話をして、ライトアップされたクライスラービルやエンパイアステートビルを背景にした薄暗いパーティーを楽しむ人を眺めているうちに、パーティーに関するある疑問が確信に変わっていった。そこで私はエディを探し出して廊下へ連れ出すと、疑惑の告発者気分で自分の直観を自慢げに披露した。「エディ。君も異様さに気付かない

か？ このパーティーにはゲイがめちゃくちゃ多い。いったいどうなってんだろう？」「なにとぼけたこと言ってんの。もともと今日はそういうパーティーなんだよ」とエディ。事態をあまり呑み込めず、あっけにとられていると、「いまパーティーに集まっている100人の中でゲイじゃないのは、ナナセ、おまえ1人だけだ」と、エディが追いつちをかけた。「えっ？ じゃあエディ、君もゲイなの？」「なんだ。マジで知らなかったのか？」「じゃあ、隣の部屋の弁護士事務所で見習いをしているロイも？」「そうだよ。実は彼とは2年間付き合っていたんだけど、3か月前に殴り合いのケンカをして別れちゃったんだ」「じゃあ、僕の左隣のコンエディソンで働いているジュディっていう女の子も？」「そうだよ。よく考えてみな。ジュディのところには女の子しか遊びに来ないし、みんな泊まって朝帰りするだろう？」

自分以外の7階の住人もまた全員がゲイであるというエディの話を聞きながら、これまでの認識は目まいとともに激しくゲシ

ュタルト崩壊した。そして私の脳は、その認識の跡地に、それまでは重要視されずばらばらに放置されていた情報の断片をかき集めたかと思うと、これまでには見えなかった情報地図を見事に描き出していた。それは、自分の認識の地と図がまるでオセロゲームの盤のように最後の一手でひっくり返し、再編成された瞬間であった。

(全体)>(部分の総和)

“ゲシュタルト崩壊”とは、私たちが部分の集合を1つのまとまった全体として見ることから得ていた意味情報を、ある瞬間に突然喪失してしまうという現象だ。たとえば誰かが微笑んでいる顔写真を眺めるとしよう。ぱっと見て笑っていることがわかる。写っているのが知人ならば、その笑顔から受ける印象はおおさら意味深いものになる。ところがしばらく見続けていると、視線は顔の全体から耳や目といったさまざまなパーツに向けられ、さらにその部分を見つめたあげくの果てには、何を見ているのかわからないという状態に陥る。ある漢



photo: CORBIS STOCKMARKET/amana images

I | n | t | e | r | F | e | e | l | D | e | s | i | g | n |

インターフィール・デザイン

字1字を書き続けると徐々に意味がわからなくなったり、ある単語を続けて発声し続けると徐々に意味があいまいになったりして、最後には何のことやらわからなくなるといった経験は身に覚えがあるはずだ。人間は多くの情報に対して、意味のまとまりを頭の中で組み立てて理解している。エディの言葉は私が勝手に抱いていた先入観を叩き壊し、新たな情報のまとまりを構成して異なる意味を作るトリガーになったのだ。

もともと「ゲシュタルト」という言葉はウェルトハイマー⁽¹⁾が中心となったゲシュタルト心理学のスローガンであり、「全体とは、部分の単純な総和(合計)以上のものである」という意味である。彼らはこの言葉の意味を「仮現運動」で説明する。たとえば暗い部屋に電球が3つ並んでいて、それを左の電球、中央の電球、右の電球と、順番に点灯させたとしても、実際には1つ1つ独立した電球が点灯したり消えたりという現象の集まりにすぎないのだが、見る者には、まるで光が左から右へ移動したよ

うに見える。このような現象を仮現運動という⁽²⁾。この現象は個々の要素である部分からは説明できず、3つの刺激のもたらず時空間パターンという全体から生ずると考えられる。つまり、「矢印のように移動して見える光」という認識の全体とは、「それぞれの電球の点滅」という部分の単純な総和以上のものということなのだ。

“地”と“図”の関係

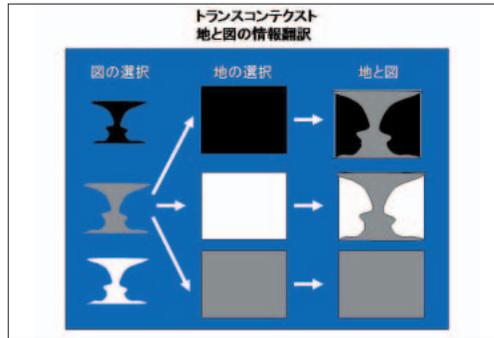
“地”と“図”とは、私たちがモノを見るとき背景が“地”であり、見える図形が“図”ということだ。人間はある対象を見るときに、視野にあるすべての情報を均等に受け取るのではなく、ある意味を持ったまとまり(図)を他の視野の部分(地)から浮か出のように見ている。ヨーロッパの中世には、首を固定して均質に塗られた白い壁だけを見せ続けるという拷問があり、それを受けた受刑者は発狂したという。カメラのオートフォーカスモードで白い壁を撮ろうとしてもなかなかフォーカスが合わないように、私たちの心も、“地”と“図”という情

報の差異が認められないところでは意識のフォーカスが合わない。また、心という“地”を背景に、トイレにも行きたい、電話もかけたい、テレビも見たいというような複数の欲望が同時に“図”として現れることはない。つまり心にはなにかを認識するためには“地”と“図”の関係を必要とし、またそこには同時に2つの“図”は浮かび上がらないという特徴がある。

TRANS-CONTEXT

そうした性質を利用したのがトランスコンテキスト(TRANS-CONTEXT:地と図の情報翻訳)だ。これは、“地”と“図”という人間の認識システムを意識的に操作して、新たな知覚を呼び起こすという情報翻訳の方法である。すなわち、何を“地”としてとらえさせるかによって“図”の意味を制御したり、“地”であるコンテキスト⁽³⁾を異なるコンテキストにつなぐことで“図”の意味が変化するように意図的にデザインすることだ。

例を見てみよう。“生”と“死”という言葉



I | n | t | e | r | F | e | e | l | D | e | s | i | g | n |

インターフィール・デザイン

があるが、映画でも小説でも書き手が人間の生を“地”、死を“図”としてとらえて表現するか、反対に死を“地”、生を“図”としてとらえるかによって、読者の印象は大きく異なってくる。生が“地”となっていれば“図”である死はより否定的な意味合いを生じ、逆に死が“地”となっていれば生はより肯定的な光を放つだろう。これは個人の人生観、宇宙観のデザインにもあてはまる。死ぬのがあたりまえ、あるいは明日死ぬかもしれないというように、死を“地”としてとらえている人にとって、生という“図”は今日を生きる感謝に満ちたものだと思うし、逆に生きていることを当然の“地”としてとらえている人の人生観には、生きているという“図”のありがたみは浮かび上がらず、“図”としての死はより脅威に映るだろう。同じように、私たちのいる宇宙という“地”を無限としてとらえるか有限としてとらえるかで、宗教観のみならず科学観も変わってくる。ミステリー小説のどんでん返しはこの“地”と“図”の関係を巧みに構築し、ある時点で一挙に転換するものだ。

絶対に犯人ではありえないと思われる人物や、死んだと思った男が生きていて裏で犯罪を操っていたという事実が突如明かされるというのは、よくあるストーリーだ。こういった作品のよし悪しは私たちが一杯食わされるまでにうまくリアリティーが構築されているかどうかでほとんどが決まる。“どんでん返し”とは、緻密なストーリーで築いた読者の先入観という“地”を一瞬にして他の“地”とすりかえることで“地”と“図”の関係を変えてしまう地と図の情報翻訳技術なのだ。

今日の結論。

“地”と“図”と認識の関係を入れ替えよ！

私たちの認識は“地”と“図”の関係によって決定されている。だが、認識とは何を“地”として見るかという視点の取り方で変化してしまう相対的なものだ。ますます多層化する情報間の“地”と“図”の関係を巧みに操り、新たな視点の獲得を可能にする地と図の情報デザイン＝トランスコンテキストに注目しよう。

Think Favorite!

編注：

- (*1) ウェルトハイマー(Max Wertheimer, 1880 ~ 1943): ゲシュタルト心理学の祖となるドイツの心理学者。『運動視の実験的研究』『ゲシュタルト学説の研究』などの著書がある。
- (*2) 映画のフィルムやセルアニメーションなども仮現運動の一例であるといえる。
- (*3) コンテキスト(context): 通常「前後関係を持ち、独自の意味を発生させうる文脈」という意味だが、転じて「行動や事象の背景となる状況」を指す。



photo: Nakamura Taku (nemaia)

七瀬至映

Nanase Yukiteru

クリエイティブディレクター&プロデューサー。情報を受発信する個人が主役となる時代のコミュニケーションの可能性をテーマに、マルチな活動を続ける。近著に『クリアロン - 創造性遺伝子』。インターネット社会の新たな価値創造の方法に迫る『サクセス・パリュウ・ワークショップ』(いずれも発行: デジタルハリウッド出版局)がある。
「あなたの情報デザインテクニック投稿大歓迎！」

mailto:yukiteru@creator.net



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp